

# 第3回 HIVに関する偏見・スティグマは、 どうすればなくせるか？

2019年5月8日水曜日、第3回関西グローバルヘルスの集いが開催されました。ゴールデンウィークの翌週で慌ただしい時期にもかかわらず、関係者6名を含む22名が参加しました。第3回のテーマは「HIVに関する偏見・スティグマはどうすればなくせるか？」と題し、大阪市立総合医療センターの白野倫徳先生より話題提供をいただき、その後ワークショップを行いました。



甲南女子大学大学院看護学研究科博士前期課程

## 柳澤沙也子

看護師として病院等で勤務した後、2015～2017年 JICA青年海外協力隊 インドネシア共和国派遣。2018年より現所属。NPO法人Rehab-Care for ASIAインドネシア事業リーダー。

## HIVを知り、考え、語る

まず、HIVの感染経路(血液、精液、膣分泌液、母乳)やHIVが体の中に入る窓口(粘膜、傷口)、感染する確率(HIV0.3%に対しC型肝炎2～3%、B型肝炎30%)といった基本的な情報についてご教示いただきました。その後、不安やうつ、希死念慮を持つHIV感染者が大勢おられること、LGBT当事者はいじめの経験や自殺未遂の経験を持つ者が多いこと等の調査結果をお示しいただきました。さらに、ケニアでの活動をもとに、途上国でも抗ウイルス薬は普及しつつあるものの、適切な管理が行われていないこと等をご教示いただきました。

写真② ディスカッションの様子



質疑応答ではHIV感染者は保険証で差別されるのか(保険証を見るだけではHIV感染者だとわからない)、日本ではHIV感染者が依然として多い理由(性教育の遅れ等)といった様々な視点から、4名からの質問がありました。

ワークショップでは、参加者は受付時に4グループにわかれ、模造紙やふせんを用いて意見を出し合いました。参加者は医療系学生や医療者のみならず、一般市民もおられ、それぞれの経験や立場、HIVに関する認識を話し合い、その上でHIVに対する偏見をなくすための方法を考えました。メディアの報道により、良くも悪くもHIVに関する知識が出回ることや、知識を得るだけでは偏見がなくなるのではないかと、といった様々な意見が交わされました(写真②)。

白野先生のまとめでは、ハンス・ロスリング氏の書籍「FACTFULNESS」(日経BP社、2019年)を参考に、従来の疾患のイメージと現在の統計の数値は乖離がある場合もあると話され、事実を知ること、伝えていくことの大切さを改め

て感じました。HIVのみならず、様々な世界の事実を知ること、伝えることが、偏見をなくす第一歩になるでしょう。このように普段話すことのないテーマについて自由闊達に議論する場を提供することの必要性を改めて感じました。

## ますます魅力のある 集いの場

この集いはグローバルヘルスを題材とすることから、海外赴任等様々な理由により参加が困難な方もおられます。今後海外でのHIV対策活動を行うことから、参加できなくなることを惜しまれる参加者もおられました。参加者のニーズに応えることができるよう、今後より柔軟な形での情報提供を考えていきたいと思えます。

今回が第3回となる関西グローバルヘルスの集い。中には毎回参加される方もおられ、定期的に開催することの手ごたえを感じています。今後も魅力ある集いを提供していきたいと思えます。

### ※参加者募集のお知らせ※

関西グローバルヘルスの集いは、関西を中心に、グローバルヘルスに関する諸問題について、あらゆる角度から、自由闊達に議論ができる場の提供を目的に始まりました。参加費は要りません。参加資格もありません。グローバルヘルスに関心のある方は、どなたでもご参加頂けます。2019年度は、奇数月の第1水曜日に開催予定です(ただし5月は、第2水曜日の8日に開催)。開催のお知らせは、日本WHO協会NEWSで配信されるとともに、協会のホームページでもご確認いただけます。普段はつながりのない人たちとつながって、真剣、かつ楽しく切磋琢磨しましょう！

本集いに関するお問い合わせは、kansai.gh.tsudo@gmail.comまでお願いします。